

# 分野横断型の協働の視点から ポストリオ+20の 可能性を探る

採録・構成 つな環編集部

リオ+20に参加した立場の異なる3人の方から、サミットで見て来たパートナーシップの発展と課題について話し合っていました。

## 産業界は熱く・活発に情報を発信した

【編集部】 今回のサミットでは、企業の情報発信が活発だったと聞きました。

【関】 コーポレート・サステナビリティ・フォーラムは、本会議前の4日間で120ものセッションを行いました。企業の最新の事例を紹介し、共有し、スケールアップのための議論を活発に行いました。主体となった国連グローバルコンパクトは、1999年に事務総長だったコフィ・アナンさんが企業トップに呼びかけたのが始まりです。10年前のヨハネスブルグサミットのときはあまり知られていませんでしたが、今では約9,000の署名機関に達し、世界最大のCSRのイニシアチブに成長しました。地域ネットワークも生まれ、活発な活動が行われ、情報がシェアされています。この10年でCSRが世界に浸透してきたことの象徴であり、世界にとってはひとつの希望の光です。

【編集部】 他のセクターの方は、企業の動きはどのように見えていたのでしょうか。

【宮澤】 色々なサイドイベントに参加して注目したことは、共通の課題を認識している有志連合、コアリションがつく



ピープルズサミット会場での市民対話

られていることです。枠を超えて協業する動きがうまれていました。ボランティアではあるけれども、大きな動きになっていると感じました。

【関】 ただ、企業は基本的に国際交渉の蚊帳の外なのです。交渉は、政府プラスNGOが中心で、企業もメジャーグループのひとつに入っていますが、声がどれだけ届いているかというところはまだ弱いと私は思っています。企業にもいろいろな考え方があり、企業活動が規制されることへの警戒もあれば、ビジネスチャンスと前向きにとらえているところもあります。政策だとか投資や金融、あるいは消費者など、みんなで一緒に世の中を変えていこう、というポジティブな思いを持っている企業も少なくないのですが、そうし

### 関 正雄 (せき まさお) 氏



損保ジャパン理事 CSR 統括部長。静岡県生まれ。安田火災海上保険（現・損保ジャパン）入社。システム企画部、社長室、営業開発第一部、近畿総務管理部などを経験し2001年に地球環境部に異

動。2003年CSR・環境推進室長に就任。2009年10月から現職。2012年4月から損保ジャパン環境財団専務理事を兼務。

### 福島 宏希 (ふくしま ひろき) 氏



NPO 法人エコ・リーグ副事務局長。2004年に早稲田大学理工学部環境資源工学科を卒業した後、フロリダ州立大学公共経営大学院に留学し、修士号を取得。帰国後、環境コンサルティング会社での

国内・海外の営業を経て、2009年1月にエコ・リーグ（全国青年環境連盟）事務局長に就任。

たポジティブな声はなかなか交渉の中に反映されません。

**【編集部】** 9つあるメジャーグループの中で、企業グループが交渉の場ではあまり発言できていないというのが意外です。

**【関】** それは、ひとつにはCSRの歴史が浅いからだと思います。1990年代からCSRの動きが起こっていたものの、目に見えて形になってきたのは2000年代からです。グローバルコンパクトが始まったのも、グローバル・レポーティング・イニシアチブ（GRI）のレポーティング・ガイドラインができたのも2000年です。EUがリスボン戦略で企業の社会的責任（CSR）を言い出したのも2000年のことです。そして日本でも2003年が「CSR元年」と言われていますから、たかだか10年の歴史しかありません。

**【編集部】** リオ+20は、産業界にとってどのような意義があり、今後どのような影響を与える可能性があるでしょう。

**【関】** コーポレート・サステナビリティ・フォーラムの盛況ぶりが象徴するように、課題解決策の提供者としての企業の存在感を示した、という意味で重要です。産業界が発信したメッセージは「スケールアップ」というシンプルなものです。問題解決のツールとか手段が議論されていますが、将来の話でも夢物語でもなく、既にあるのです。私たちは、解決策を手にはしているけれど、今はまだ規模の小さなものでしかないのもっと大きくしていこうということです。そのために何をすべきかを、産業界から発信しました。

---

## 発言力が増した NGO

---

**【編集部】** ヨハネスブルグサミットに比べ、リオ+20では、市民セクターに属するNGOなどが交渉においても発言力

### 宮澤 郁穂（みやざわいくほ）氏



IGES（公益財団法人地球環境戦略研究機関）プログラム・マネージメント・オフィス特任研究員。2006年に米国クラーク大学国際関係・国際開発学科を卒業した後、スイス・ジュネーブ高等国際問題

研究所政治学部で修士号を取得。2010年1月よりIGESガバナンスと能力グループにて東アジア地域の環境協力の在り方やリオ+20に係る研究調査に従事。2011年8月より現職。

が増したと聴きました。政府との関係が良くなった理由はどのようなところにあるのでしょうか。

**【福島】**「リオ+20地球サミットNGO連絡会」が中心になって動いていただいていることでもあるのですが、外務省とNGOの意見交換会がリオ+20の会議のずっと前から行われていて、現地でも数回行いました。外務省の方からも「今度やりましょう」と声をかけていただくこともあり、非常に良い関係を築くことができました。その中で政府の立場も説明いただきましたし、NGOとして気になっている点について伝えることができたと思います。

**【編集部】** うまく伝えることができた要因は何でしょうか。

**【福島】** 場を丁寧につくってきたことだと思います。NGOのメジャーグループも、企業と同じようにそれぞれに考え方や立場が違います。リオに持っていきたい思いや方向性も違うので、それぞれがバラバラに政府に持っていくと、向こうも困ってしまうと思います。セクターとしてコーディネートする役割を持つ連絡会が生まれ、政府との関係を築きつつ、言うべきことは言うけれども、政府の事情も理解して、ペースを保って進んでいけたのが良かったのではないのでしょうか。NGOの中でも定期的に打ち合わせをしたり、メールなどで意見を交わしたり、調整機能があったことが要因かと思います。

**【宮澤】** 政府や他のセクターの交流がありました。その一つが日本の国内準備委員会です。これから開催されるものも含めて8回開催されました。委員会には明確なアジェンダがあり、それをもみ合いながら進んできました。私の知る限りでは、他の国でこうした様々なステークホルダーを巻き込んだ活発な動きがあったようには見られませんでした。

**【編集部】** 政府間交渉に、市民セクターの声を反映させていくことが重要であることは誰もが認めていると思います。これからどのようなことが必要になって来るでしょう。

**【福島】** エコ・リーグは国連のメジャーグループの中では「子

### リオ+20 成果概要 (3)

#### その他

- ・企業の持続可能性レポーティングのグッドプラクティス、モデル開発の奨励
- ・ユースのアピールにより、将来世代のニーズを配慮することに関する文言が盛り込まれた
- ・原子力発電の危険性などの文言は盛り込まれず



市街地で開催された市民によるデモ

ども・若者」として活動しています。「子ども・若者」は世界中から集まったときに、全体の方針を作り、ポイントを抑えて組織的に動いていました。成果文書の中に盛り込んでいただいたことが3つあります。

【編集部】組織的に動くことができたのは、どのようなポイントがあったのでしょうか。

【福島】準備会合の直前にイベントを開きました。ブラジルの人たちのためにポルトガル語でやるのが2日、その後英語で3日。合計5日間の集まりがありました。その段階で組織化の動きを作りました。まず、互いの活動分野や関心を知って、皆でリオの大切さや論点を共有し、その上で、みんなでどうやっていこうかと考えていました。このイベントの前から、具体的にはニューヨークの準備会合のころから、交渉の動きを追っている中心メンバーがいて、作戦立てをして動いていました。日本からも行きましたが、主にはヨーロッパやアメリカの若者が中心でした。

【編集部】そのような場で得られた情報が日本でもキャッチできていたので、流れに乗っていくことができたわけですね。わくわくするプロセスがあったように見えます。

【福島】もっと強いリーダーシップがあった方が良かったとおっしゃる人もいましたが、世界中から集まった多様なバックグラウンドを持つ人をまとめて、良く議論を引っ張っていったと思います。興奮してくると、あまりルールを守らないで動き出してしまう人たちもいますが、そこは厳しく抑えていました。例えば、許可を得ていない場合は絶対にデモをやるなどか、与えられた枠内で何を伝えていくかという議論ができていました。

### パートナーシップを引っ張ったボランタリーな動き

【編集部】20年前のリオサミットのときには「リオ原則」や「アジェンダ21」などで、参加や協働がうたわれました。今回どのように評価され、これからどう進めるかについての議論はあったのでしょうか。

【宮澤】期待に比し成果は少なく具体性に欠けるという評価もありますが、少なくとも既存の枠組みを新たに政治的にコミットするという成果はあったと思います。ただ、交渉過程では、まだ進捗の評価というものは包括的にできていなかったのではないかと思います。テーマ設定もトップダウンの要素が強く、パートナーシップだとか協働という観点で交渉が進められたことはあまりなかったのではないのでしょうか。パートナーシップの重要性は認識されていましたが、成果文書もそれぞれのステークホルダーの役割に焦点があてられることが多くありました。

【関】企業の立場から見ると、成果文書の中に直接CSR言及している部分が2カ所あります。パラグラフ46はCSR全般について、47はCSR報告書のあり方について言及しています。企業活動の中にもっと環境や社会への配慮を統合していく。そして、その結果を報告書にも反映させるということです。そういうところまで合意文書の中では踏み込んで書かれています。また、企業の主体的な動きもあります。世界の保険会社が1年半くらいかけて、「持続可能な保険原則」を起草しました。キーワードはResilience(回復性)、Inclusiveness(包括性)、Sustainability(持続可能性)です。保険会社の強みを活かしたら、もっと持続可能な発展に貢献できるはず。世界27の保険会社が初期署名会社となってリオ+20でこの原則を発表しました。こうした「持続可能な保険原則」や「自然資本宣言」などの発表は、ごく一部にすぎず、その他にもいろいろ新しい動きや芽が生まれています。民間のさまざまな新しい動きやイニチアチブが生まれたことも、リオ+20の見逃せない大きな成果です。

【宮澤】 公式なものだけでも 500 以上のサイドイベントがあったといわれていますが、同じようなメッセージを発しているようなものもたくさんあり、どこに行けばどのような情報を得られるか、なかなか把握できませんでした。共通の意識を持つグループがパートナーを組んで、大きなメッセージを発信するということがあっても良かったのではないかと思います。

【関】 せっかくのサイドイベントが縦割りになっているという印象がありました。コーポレート・サステナビリティ・フォーラムも企業が圧倒的多数でした。あの場に NGO との協働事例や政策との連動の事例がもっと多く紹介できれば、さらに進化したものになっていたと思います。

【編集部】 政府間交渉の場以外で起こった、そのような情報をまとめて発信するようなことができると良いですね。

【関】 そうですね。企業セクターの動きはあまり報道されていないので、企業自ら発信することも重要だと思います。

---

## リオ+ 20 の後に取り組みべきこと

---

【編集部】 最後に、これから何をやっていくべきか一言ずつお願いします。

【関】 政府交渉の結果がどうであろうと、企業がやるべきことは明確です。それは持続可能な発展を本気になってリードしていくことです。特にこれからは新興国・途上国でしょう。リオ+ 20 のコーポレート・サステナビリティ・フォーラムにも、中国人の参加者がたくさんいました。まだ浸透度合いは一部かもしれないけれど、我々も一緒になってやっていかなくてはなりません。この 10 年間は先進国に CSR が浸透してきました。次の 10 年は、新興国や途上国に CSR をいかに定着させ、広めていくかに、力を注ぐべきではないかと思います。

【宮澤】 リオ+ 20 のように国際交渉がいわゆる南北対立だ



子ども若者グループによる本会議場でのデモ

けでの一筋縄ではいなくなったことを鑑みると、リオ+ 20 を一つの節目ではなく今後の持続可能な開発を促進させるためのスタートとして考える必要があると思います。

その一環として SDGs のフォローアップをしていくことが重要です。環境と開発をブレークスルーする枠組みだと思います。これをボトムアップ、また、協働を上手く使ってどう作っていくかに注目したい。それから、国際的に活動する一研究機関として、リオ+ 20 全体の成果をアジア全体として議論する場を多く作り、アジアの視点から積極的にインプットしていきたいと思います。

【福島】 2つあります。一つは政府間交渉の中で、子ども若者グループとしてロビー活動やアクションをしたことによって、将来世代のためのレポートिंगをするということが入りました。簡単に言うと、現在進行中の開発や開発計画が、将来世代に環境や人権の面でどのような影響を及ぼすかをレポートिंगすることを検討しようという内容です。それが意味のあるものになるよう行われるよう監視し、アピールすることが必要です。もう一つは、若者をグループとして強化することです。ヨーロッパでは、リオ+ 20 に関係なく、国の中に若者たちが国や地域の問題を議論して、必要であれば国に政策提言するような仕組みもあります。そういうことをやっている人たちがヨーロッパから集まり、ヨーロッパレベルで話し合う場もあります。そこで話し合った結果をリオでどう訴えるかなどという段階の踏み方がしっかりしています。日本の若者もいろいろところでやっていますが、他のアジアも含め組織的にやっていくということがあまりありません。もっと全体を巻き込んで動いていく仕組みがあるといいのではないかと思います。まずはそういうことを地域から入っていきたいと思っています。

【編集部】 最後に力強い、希望の持てるお話をお聞かせいただき、ありがとうございました。

## リオ+ 20 成果概要 (4)

### その他の主な成果

- ・日本からは玄葉外務大臣が参加。「緑の未来イニシアティブ」を発表した
- ・ピールズ・サミット: ブラジル市民社会が主催しリオ市内のフラメンゴ公園で開催。8 万人も参加するデモが行われた
- ・ブラジル政府主催により SD (持続可能な開発) ダイアログという市民主体のダイアログが開催された
- ・ソーシャルメディアなどのインターネットの活用もあり、一般の市民が国連に直接声を届ける機会が増幅した